――古い畳の匂いを鼻腔に感じながら、天井の染みを上の空で見つめる。

見慣れない天井、嗅ぎなれない匂い、そして未だ終わらない残暑。

文机の上に置かれた何枚もの白い原稿用紙が開け放った襖からの風に煽られ、急き立てるようにはためく。

（そう急かされても、書けないものは書けない）

投げ出した仕事に心の中でそう毒突き、深く息を吐く。

腹の具合を見るに、間もなく昼になる頃だろうか。

飯が出来るまでいっそ一眠りするかと考えた頃、縁側を軋ませながら気配が近付いてくる。

「……ご主人」

開いた襖から顔を覗かせたのは、頭に獣の、狐の耳を生やした色素の薄い娘。

人形のように色白で整った顔立ちをしているその娘は、畳の上に横たわる私を見ると、ただでさえ石のように硬い表情を更に冷たくした。

「……ご主人は今頃、真面目に机に向かっていらっしゃるだろうと思っていたのですが」

「……書けないものは書けない」

心の中の毒突きを今度は言葉にしてその娘、みやこに投げかける。

彼女は取り澄ました顔で薄く溜め息を付くと、私の足元に座り込む。

「……おい」

みやこの意図を早々に察し、軽く抗議の声を上げる。

「今朝は、お仕事があるからとのことでしたが、その様に筆を投げていらっしゃるのであれば……構わないではありませんか、ご主人」

そう言いながら、みやこは両手でこちらの太股から股関節までを艶かしく撫で上げる。

色情を感じさせる瞳をこちらに向けながら、官能的な手付きで情欲を煽る。

「それに、一度出せば……頭の霧も晴れるかもしれませんよ」

細い指先で、下着越しにペニスを引っ掻くように刺激しながら言う。

みやこの無防備な胸元も視界に入り、下半身への微弱な刺激も相まって沸々と下半身に熱が篭ってくるのを感じる。

「ほら、ご主人。
いつもの様に、しっかり搾り出して
差し上げますから、どうか……」

みやこの方が懇願するように、艶っぽい瞳でこちらを
見つめながら誘う。

淫靡な誘いに飲み込まれるように焚き付けられてしま
った私は、そのみやこの懇願に、頼む、と短く返し、下
半身を彼女に委ねた。

「では」
そそり立ったペニスを手馴れた手付きで下着から引っ張り出し、うっとりとした瞳でそれを見つめる。
「昨晩から、致しておりませんでしたから……。私にとっては、久しぶりの、ご主人の……は、ぁ……」

頬を赤らめ、目の前のペニスに顔を近づける。
そして口を開けて、唾液に塗れた舌を小さく伸ばし。
「まずは、裏筋から……致しますね……」
言った通りに、ペニスの裏の筋を舌先で突くように舐め始める。

「ん、えぅ……この裏が……良いのですよね……？」

ちろちろと小刻みに裏筋を舐められる刺激に、違和感に近かった感覚が徐々に快感に変わってくる。

『判っております……ご主人の、お好きなトコロ……』

みやこは悪戯っぽくそう言いながら、上目遣いにこちらを眺める。

そしてこちらと目を合わせながら舌を小さく動かし、その舌から裏筋に唾液を滴らせる。

「私の唾液も、いっぱい使って……
しっかりとろとろに……いたします……ん、ぁ」
は、という微かな息遣いの後に口を開いたみやこは、
更に舌を伸ばす。
その舌にたっぷりと唾液を乗せて、ペニス全体に唾液
を馴染ませていく。
「こう、ひて……しっかりぬるぬるになるよう、
塗り込んで……」

融け掛けのアイスキャンディーを舐めるように、ペニスの裏側を根元から裏筋の先にかけて、丁寧に舐め上げるみやこ。

前髪から覗く瞳は上目遣いでこちらの反応を窺い、それに満足すると再び口淫に集中するため目を伏せる。

『ご主人の、おちんぽも……ご主人自身も……とろとろになるように、致します……ね……』

卑猥な単語を口にしながら、丹念にペニスを舐め、唾液を塗り付け、こちらの脳を蕩けさせようとしてくる。

「んは……っ、ご主人、ちゃんとおちんぽに、集中してくださいね……。いっぱいお射精、していただきたい……ですから……」

唾液塗れになったペニスから舌を離し、こちらを見つめるみやこ。

こちらの様子を窺うその間も、手で唾液を塗り広げるようにペニスをゆっくりと扱く。

「……あぁ、判って、る……」
ぬちゅぬちゅという水音を立てながらペニスを優しく扱くみやこに言葉を返す。
自らの口淫で喘ぐ私の姿を確認したみやこは、再びペニスに目を落とす。
「では……は、ぁ……む」

そして更に大きく口を開いたかと思うと、ペニスを先端から抵抗なく咥え込んでいった。

「おぁ、ぐ……っ」

唾液塗れになっていた口内に飲み込まれ、強烈な快感に無意識に腰が跳ねる。

「んぷ……んぅ……っ」

微かに驚いたような様子を見せるみやこだったが、こちらが拒否する素振りを見せていないことを確認すると更に奥までペニスを咥え込む。

口内の唾液を零さないように、じゅるじゅると卑猥な水音を立てペニスを吸い上げながら。

「ん～……ぅ、ん……ふ、んぷ……」

みやこは喉奥までペニスを咥え込んだ所で目を伏せて息を整えている。

そして頭を上下させ、唇を使ってゆっくりとペニス全体を扱き始めた。

『いっふぁい……いっふぁい絞りらひまふ、ね……』

その言葉通り、ペニスの奥の奥に溜まった精液を搾り出すようにねっとりとした唇の動きでペニスを扱く。

「ん、ちゅ……ぢゅ……ッ、んぐ……」

頭を上げるときは優しくペニスを吸い上げ、頭を下げて再びペニスを飲み込む際には口内に溜め込んだ唾液を塗りつける。

これ異常ない程に器用な、そして丁寧な口淫をみやこは続けた。

「ぢゅ……ッ、ぷぁ、ふ……

こう、ひて……吸い上げると、腰が……

浮いてしまいますか……？」

ペニスを吸い上げたかと思うとそのまま一瞬口を離してこちらを様子を窺ってくる。

表情は相変わらず無表情だったが、その言葉の端にはどこか悪戯心のようなものが見て取れた。

「はぁ、む……、ちゅ、ぢゅ、ぢゅう……ッ
んぐ、んぅ……ッ」

こちらの返事を待たずに再びペニスを思い切り咥え込むみやこ。

先程よりも早く頭を上下させ、少しずつだがこちらを絶頂に向かわせようとしているようだった。

「いふれも……らひへ、くらはい……っ
はぷ、ちゅ、ぢゅ……ッ」

両手を優しくペニスの根元に沿え、唇の扱きに合わせて手も僅かに上下させる。

根元から上ってくる精液を逃さないように。

「ん～……ッ、んっ、んっ、んぶ、ん、ぢゅ……ッ」

みやこは頭の上下運動を少しずつ早く、リズミカルな動きにさせる。

その一定のリズムと、潤滑液を大量に使ったようなみやこの口内が相まって、下半身の奥底から熱い物が込み上げてくる感覚が一気に強まる。

「んッぷ……ぢゅっ、ほぁ、こえ……
ろう、れふか……ッ？
いっふぁい、おくちで扱いて……あッんぅ……
さしあげ、まふから……ッ」

みやこもこちらの限界が近いことを敏感に察したのか
射精欲を煽るように卑猥な言葉を投げかける。

「ぢゅ……ッ、ちゅ、んむぐ……ッ
ふ、ぁ、へーえき……くらふぁい……ッ
は、ぶ、ぢゅ……ッ、ちゅッ」

自室に響く水音と、眼前でペニスを夢中で咥えるみやこの姿。
淫乱とすら言えるその姿が、より一層興奮を高めていく。

『んぅ、ぐぢゅ……ッ、ぢゅッ
ちゅ、ぢゅぅぅ……ッ！』

ペニスの根元から上ってくる精液を敏感に感じたみやこが、頭と手の動きに集中する。

一心不乱に頭を振り、唾液塗れになったペニスを手と唇で扱く。

こちらのツボを抑えたその動きのテンポに応えるように、みやこの口内に射精するべく下半身の射精感に身を委ねた。

その瞬間――

「んぶ……ッ、んぅ、んっ
んぢゅ、んううぅぅ……ッッッ！」

目の前が一瞬白くなり、気が付くと思い切りみやこの口内に射精していた。

「んふ……ッ、ん、ぢゅ、ぢゅぅぅ……
ふぅ、ちゅぅ……む、んむ、ぐ……」

思いの他大量に放たれた精液は、ペニスを咥え込んだ
みやこの唇の端から僅かずつ溢れてきている。

『ちゅ……ぅ、ぁ、あ……らめれふ、まだ……
はむっ、ぢゅ……ッ、ちゅ……』

口の端や手を汚していく漏れた精液を気にも留めずに
断続的に放たれる精液を逃さないようにと、みやこはペ
ニスを優しく吸い続ける。

「はぁ……らめ、れふ……精液、漏れへ……
ん、ちゅっ、ちゅうぅぅう……ッ」

息を荒げるこちらを見ず、ペニスを咥え込むみやこ。
断続的に続いた射精も終わり、みやこの口内から与えられる刺激がむず痒いものに変わり、私はみやこの肩を掴みペニスから口を離させる。

「ん、ぷぁ……ッ、は……ッ、はぁ……
ごしゅ、じん……」

口の端から精液を溢れさせながら、みやこは虚ろに目の前のペニスを見つめている。

みやこは自身の唾液と私の先走り汁、そして精液塗れになったペニスを優しく両手で支える。
「あぁ……ご主人、もう少し……我慢して……は、ぁ……んちゅ、ぢゅ……ッ」
「おわ……ッ」

射精直後で敏感になった亀頭に、みやこが無遠慮に舌を這わせる。
微かに腰が跳ねるが、それに構わずみやこはペニスにこびり付いた精液を丁寧に舐め取っていく。
『えぅ……んっ、ちゅ、ぢゅる……ッあ……勿体無い、れふ……。ぢゅっ、ぢゅぷ、ぢゅるる……ッ』

卑猥な水音を立てながら、射精された精液を啜り取っていくみやこ。

むず痒さに耐え、荒くなった息を整えながらそんなみやこの姿を眺める。

『……』

微かに……そう、微かにだが――この土地で暮らしていく為の体力は、今の私にあるだろうかと心配になってしまった。